信毎歌壇

小島　なお選

三峰川の雪解の音にひらかれて背筋はひかりの台地となれり　（伊那市）中村　初治

解散にかかる費用は855億ラーメンたべたら8550万杯　（塩尻市）三溝みい子

戸棚開け「お菓子たくさんあるよね」と繰り返し言う叔母ポツンと逝く　（飯島町）酒井千代美

平和という語のやわらかく唇をわたって乙女椿の風格　（松本市）飛　和

公魚の背中反らせて釣り上がる羽田飛び立つジェット機のごと　（坂城町）栖沢　満則

旨そうな湯気のあがれるおでん鍋めがね拭く人眼鏡とる人　（佐久市）木内利一郎

イクラ食む時に私を見た様なそんな気がする小さな目たち　（泰阜村）松島　房子

立ち退きで家の解体5日間滅する物のすべてが早し　（安曇野市）加藤　文人

抽斗に残りし二枚のポチ袋母を送りて六度目の冬　（長野市）山岸しげお

待ってた！と野沢菜漬けを抱きしめる私の味に染まりし友よ　（山形村）中村　恵子

佳作

桜の木の小枝二本を拾いきて幼言いたり「つなげてあげて」　（長野市）宮崎　久子

絶滅後AIが編む歳時記の子規忌の隣り人類忌かな　（上田市）田名網　剛

選評　第一首、南アルプスの雪解け水を運ぶ三峰川。春の陽を照り返す水面の光が背中を芽吹かすように。第二首、今回の衆院選の経費は約855億円とされた。千円のラーメンに換算すると8550万杯分。第三首、生きていた頃の口癖もしぐさもありありと思い出せるのに。ポツンの深い寂しさ。第四首、「へいわ」と声に出すときの開いたままの唇。その優しい柔らかさは乙女椿の端正な美しさに通じる。

米川 千嘉子 選

新築の家の香匂う君の髪抱えて婆は『ぐりとぐら』読む　（佐久市）赤岡　厚子

いつまでも国際女性デーがある天女も人魚も生き延びられぬ　（松本市）美甘　歓

ばらばらな心を拾うために聴く十年前に好きだった曲　（松本市）点　と　弧

目を覚ましまず一杯の白湯を飲むこころの水門あくるごとくに　（安曇野市）細川　恒

眠る山銃声響く鹿狩りに我の散歩はコースを変えて　（上田市）大久保幸吉

縁側に座布団出してひなたぼこ孫の自慢をひとりごとにて　（中野市）小林かつ子

また今日も診察室より響きくる主治医の咳を皆で聞き居る　（松本市）堀内　悠子

九十路ともに夫逝きし老姉妹寄り添い暮らし春の香を待つ　（箕輪町）佐々木安教

老い二人座るベンチの硬きゆえ長居はできぬ春の公園　（長野市）宮沢　信博

お姑さんあなたの息子は命日を忘れています元気でいます　（佐久市）佐藤千栄子

佳作

おじぎして横断歩道渡る子やパステル色のマフラー固し　（佐久市）武藤　尚子

老いた身にタブレット注文慣れなくて楽しき時間多くを奪わる　（辰野町）矢島あさ子

選評　第一首、孫の柔らかい髪から新築の家の匂いがする、というのが印象的。作者にとっては子どもが一軒を構えた、その喜びや安堵の香りなのだ。第二首、国際女性デーとは対象を人間に限ってそれを二分する考え方に基づくものかも。そこから漏れる存在を作者は思うか。第三首、上三句が苦しそうで辛いが、たしかに音楽は人の身体や全体性に沁みて働きかける。第四首、「こころの水門」が巧い。

小池　光 選

好天に思わず連く歩みきてお地蔵さまの笑みに手合わす　（安曇野市）細川　恒

小一で転校したる友をりて思ひ出しつつ八十路となりぬ　（飯綱町）坂井　寿男

フト気付く蛍光灯のスイッチを押す時背伸びをしている事に　（麻績村）小山みよ子

けふひとひすべてがうまくゆきさうな気がして朝のトイレを出たり　（長野市）原田　浩生

視力得て自筆に名前書く夢の覚めて現に戻る寂しさ　（千曲市）上原　博司

「恥ずかしいからきかねえでくれや」と言ってから「八十四才」とパン屋のおっちゃん　（長野市）原田りえ子

（一億円貯めたい）と言った友のゐて半世紀過ぎその後は知らず　（飯山市）小野沢竹次

甲武信ケ岳から水を頂く千曲川母なる河は越後へ流る　（長野市）近藤　光子

牛乳のパックの口はいつだって飲むなと言うよううまく開かない　（千曲市）関　津和子

いろは坂四十八のカーブあり我等来た道示すが如く　（木曽町）新村　亮三

佳作

横手山の雄姿を望む丘にして芭蕉の碑いま陽にあたたかし　（長野市）窄川　志郎

街角は朝日に白く輝きぬ落ち葉、枯れ木に雪舞い降りて　（伊那市）赤羽　正彦

選評　第一首、春の初めのいい天気の日。思わず散策の足を延ばして遠くまで来てしまった。道端のお地蔵さまに思わず手を合わせた。冬の終わったよろこびがあふれている。第二首、小学校1年生だったからはるかな過去である。転校していったクラスメートをなぜか覚えている。彼はその後どういう人生を歩んだか。わたしはもう八十路になった。第三首、老境の体の変化を具体的に歌っている。